



本日はよくお参り下さいました

朝晩冷え込む季節になりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。七五三の衣装に身を包んだ子どもたちのお参りが日に日に増え、境内はとても華やかです。子どもたちの心は幼ければ幼いほど純粹です。吉川惟足という神道学者はこう言っています。

「神のたましいを受けているのが人の心の働きである」と。私たち日本人の祖をたどると天照大御神にいきつくというのが神道の考え方です。ということは、誰しものが神の御心を持っていることとなります。つまり、神と人とは、本体と分魂という関係で、一体をなすものであるということです。そういう目で見ると、悪事をして嘘をついても一番そばにいらっしやる自分の中の神様はしっかり見ていることとなります。後ろめたさというのはこういうことから来ているのかもしれませんが、自分に恥じることなく生きることは、とても大切なことなのです。子どもたちには、そんな気持ちをもって人生を歩んで欲しいと願っています。今月も皆さまがご無事で幸多い日々でありますようお祈り申し上げます。道子



11月

1日 月首祭 月の初めの恒例祭祀。

3日 文化の日(明治節) 自由と平和を愛し、文化をすすめる日。もとは近代日本の礎を築いた明治天皇の誕生日(旧暦9月22日)です。つまり天長節(天皇誕生日)でした。崩御されてからは、普通の日になってしまいましたが、国民の請願運動が起こり、2万人の署名が議会に提出され、昭和2年の3月3日「明治節」として制定されました。戦後は新憲法公布とも重なり「文化の日」という名称になりました。

23日 新嘗祭 「新嘗祭」は「しんじょうさい」ともいい、「新」は新穀を「嘗」はご馳走を意味します。新穀を得たことを神さまに感謝します。この日、宮中では天皇が感謝をこめて新穀を神々に奉るとともに、御自らも召し上がります。新嘗祭の起源は古く、『古事記』にも天照大御神が新嘗祭を行ったことが記されています。※当社では11月22日に行います。



15日 月次祭 月の半ばの恒例祭祀。

七五三 三歳の男女・五歳の男児・七歳の女児がこれまで無事に過ごしてきたことに感謝し、今後の健全な成長を祈ります。災禍を祓う厄払いの意味もあります。

日本神話の世界 全十一回

第八回 「因幡の素兔(しろうさぎ)」

大国主の神には、たくさん兄弟神、八十神(やそがみ)がいました。大国主の神は始めは大穴牟遲(おおなむぢ)の神と呼ばれていました。ある時、八十神が八上比売(やがみひめ)に求婚するため稲葉(因幡。現在の鳥取県東部)の気多の岬に来たとき、和爾(わに)を騙して赤裸にされた兔(うさぎ)がふせつていました。兄達は兔に向かつて「海水を浴び、風にあたり、山の上で日を浴びなさい」と言いました。言われた通りにした兔は痛み苦しみました。そこへ最後に従者として荷物を背負わされ、行列の一番最後を歩いていた大穴牟遲神が兔に「真水で体を洗い、川岸の蒲の穂をたくさん敷いて転がりなさい」と教えました。元の体に戻った兔は「あなたの兄たちは八上比売と結婚できません。八上比売と結ばれるのはあなたです」と言いました。この予言は見事の中し、八上比売は、八十神の求婚を断り、大穴牟遲神と結婚すると言ったのです。これに怒った兄達は大穴牟遲神を殺そうと相談し、伯伎国(ははきのくに、鳥取県西部)の手間山の麓を訪れ、次のように言いました。「この山に住む赤い猪を追って落とすので、待ち伏せて捕らえよ。もし逃したらお前

和邇とは鮫(さめ)ではないかと考えられています。



を殺すぞ」と言って猪の形に似た焼け石を転がし落としました。大穴牟遲神は火傷を負って死んでしまいました。それを見た母神は嘆き悲しみ、天に昇って神産巢日(かみむすび)の神に我が子を助けて頂けるよう頼み、貝の女神の貝殻の粉と蛤の汁で火傷の治療をし、大穴牟遲神は生き返りました。すると八十神は、また大穴牟遲神を騙して山に入り、切り倒した木を割って楔(くさび)を打ち込み、その隙間に入るよう追い込むと、楔を抜いて挟み殺してしまいました。そこでまた母神が泣きながら息子を探し出し生き返らせました。そして「ここにいたら八十神に滅ばされてしまう」と言って紀伊国の大屋毘古神のもとに逃しました。そこへまた八十神が現れ、矢をつがえて大穴牟遲神を射抜こうとした時、大屋毘古神は木の幹の股から逃し「須佐之男命の居られる根の堅州国(かたすくに)に行きなさい。必ずよいように討つてくれるから」と言いました。「大穴牟遲神」つまり「偉大な土地の神」という意味の名の神が「偉大な国の主」を示す「大国主神」に成長する物語は次回に続きます。ちなみに兔を癒やした蒲の穂は止血の薬として用いられ、貝の女神による蘇生物語は赤貝の粉を蛤の汁に溶いた薬で火傷治療に用いる古代療法です。神話には古代の人々の知恵も伝えられています。参考文献『神話のおへて』神社本庁監修 扶桑社発行 / 『現代語古事記』行田恒泰著 学研パブリッシング発行